

都留市地名考

今月号から十二回にわたり、都留市文化財審議会会長の窪田薰先生に、「都留市地名考」と題し、執筆連載していただきました。

郷土の地名にまつわる歴史や文化により一層理解を深めていただければ幸です。

○はじめに

ふるさとの自然と、祖先の生活とのかかわりの中で、必要に応じて地名が発生した。地名は古代、中世、近世及びその後に生じたものに区別することができる。したがって地名を通してふるさとの歴史、文化、宗教など、当時の有様

がある程度推察できるのである。
地名を解釈する場合、宛字の漢字をもとに解釈すると誤解が多いので、平仮名か片仮名になおして考えた方が誤りが少ない。

例えば「や村」の「や」は、「地名語源辞典」（山中襄太著）によると、谷・矢・箭・屋・家などの

地名を解釈する場合、宛字をもとに解釈すると誤解があるので、平仮名か片仮名になお考えた方が誤りが少ない。

谷戸、谷地の意となり、谷村とは底湿地滯の村の意となる。

『三代実録』に、貞觀一四年（八七二）都留郡の大領、小領として矢作部連一族のことが記され、大領、小領は郡司の中の役職名で郡領ともいう。

		2月	2月
2月3日	節分		
12日	初午（西涼寺の儀秀		
	稻荷は特に盛大であ		
23日	る）		
3月3日	六地蔵縁日 用津院		
	ひな祭り（都留市で		
	は月遅れの四月三日		
	の方が多い）		

字が地名用語としてあるとしている。

都留郡守護小山田越中守信有が、
中津森の居館が焼け、天文元年
(一五三二) や村に移転したこと
について『妙法寺記』には、「谷

村へ御越候」と谷の字を用い、『甲斐国志』では、「屋村へ御越候」と屋の字を宛てている。
や

昨年十二月二十四日から二十七日までの四日間、昭和六

十二年より交流を続けており
ます西原町より、島袋宗正団
長をはじめとする一行三十九
名が都留市を訪れました。

二十四日には、都留市の歴史・文化等の学習や都留文科大学を見学した後、都倉市長をはじめ、昨年西原町を訪問した市内小中学生などが出迎え、文化会館で歓迎レセプションが行われました。この日は

A black and white photograph capturing a group of approximately ten individuals in what appears to be an indoor workshop or a backstage area. The scene is dimly lit, with a bright light source visible in the upper left corner. In the center-left, a man wearing a dark jacket and light-colored pants is seated, facing a large, dark, cylindrical object that looks like a drum or a barrel. He is holding a long, thin wooden stick or mallet. To his right, several other people are standing, some looking towards the central figure and others looking away. The background is dark and out of focus, suggesting a cluttered or industrial environment. The overall atmosphere is one of a candid, behind-the-scenes moment.

クリスマスイブで、ツリーの飾られた会場での交流を楽しみました。

二十五日には、富士急ハイランドでのスケート教室や乗り物を楽しみ、特にスケートは初めてとは思えないほど手に滑れるようになりました。

二十六日には、長野県白樺湖にあるスキー場でのスキー教室、スケートより難かしそうでしたが、みんな一生懸命取り組んでいました。

二十七日に長野をたち、冬の想い出を胸に帰路につきました。

「西原町青少年ふれあいの旅」

一行が來市